

# コロナ禍における臨床検査技師の役割

臨床検査室 副技師長 和泉元 雅子



筆者(右端)と細菌検査室スタッフ

中央後は遺伝子解析装置 GENECUBE。一度に24検体の検査が可能。

新型コロナウイルス感染症をきっかけに広く知られるようになった「PCR 検査」は、1990 年前後に開発された比較的新しい技術です。検査機器は高額で検体の取扱いも煩雑なため、主に大規模病院や検査研究機関で遺伝子検査に精通した検査技師が実施していました。

流行初期には検査体制が整わずもどかしい思いでしたが、愛媛県の要望を受けて当院も「発熱外来」を開設しました。発熱外来では、検査技師が屋外テントで感染を疑う患者さんの鼻咽頭から検体を採取し（写真1）、細菌検査室で抗原検査とPCR 検査を行っ

ています（写真2）。開設当初、院内では抗原検査しか実施出来ず PCR 検査は外部委託していたため、患者さんへの結果報告は翌日になっていました。

PCR 検査機器を導入した現在では、検体採取から報告までに要する時間も 70 分程度になりました。ピーク時には 1 か月の検査数が 1,400 件を超えましたが、有症状患者さんのみならず、職員や濃厚接触者の囲い込みにも迅速に対応する事が出来ました。



写真1



写真2

安全キャビネット内での作業

コロナ“禍”=“わざわい”ですが、医療にイノベーションを起こしました。操作性・汎用性の高い検査機器や試薬が急ピッチで開発され、同時に検査技師の知識や技能も向上し、遺伝子検査がより身近になりました。薬局やインターネット通販でも新型コロナウイルス抗原検査キットの販売が承認され、検査の需要は拡大しています。

今後社会経済活動を維持する上で、検査体制の強化と精度の担保が課題と考えられ、採取方法や結果の解釈等について正しい情報を発信する事が、私たち臨床検査技師に求められる重要な役割です。

## The Generalist

### ～事務部～

## 「病院経営管理士」を受講修了しました

事務長 浅野 光孝



2020年4月に事務長職を拝命しました時に、病院経営管理士通信教育（日本病院会）を受講することにいたしました。病院組織は大きく分けて、診療部門と経営管理部門の2つから成り立っています。「事務長」は、経営管理部門（総務部、経理部、医療事務部）の長としての役割を果たすと同時に、院長の補佐として病院全体の運営や組織管理に深くかかわります。そのような重責を担うにあたり、一から病院組織運営について勉強したいと思ったからです。

この通信講座は 45 年の歴史があ

り、1,200 人を超える卒業生が全国で活躍しています。全 30 科目 49 単位（別表）、のべ 20 日間のスクーリングに加え、17 科目のレポート、12 科目の試験、副読本 12 冊を約 2 年かけて履修し、最後に卒業論文（6,000 字程度）を提出します。組織図をもれなく横断するような科目構成で、講師陣は医療界を代表する第一線の方々です。実際の自院の課題を振り返りながら、新しい知識を取り込んでいきます。東京でのスクーリングは全てリモートに振り替えられたものの、日常業務後のレポート作成は、何度も推敲を要

し、想像以上に負荷がかかりました。目に見えて何かができるようになった、というわけではありませんが、学びそのものが血肉となっていることと思います。



認定証 (盾と賞状)

講座の中で繰り返し説かれたことは、これからの病院経営にとって、事務部門の成長がいかに必要か、ということです。病院が永続的に地域社会へ貢献するために、ヒト・モノ・カネという社会資源を事務職が中心に効率よく運用管理しなければなりません。多角的な視野を培い、得意分野を伸ばしていく。その学びの機会をできるだけ多くの職員がもてるよう、組織としてもサポートをしていきたいと考えています。

医学概論	病院施設・設備管理	組織管理概論
診療部門管理	感染管理	統計解析実践法
看護部門管理	診療情報管理	病院経営分析
薬剤部門管理	医療安全管理概論	マーケティング論
医療技術部門管理	病院建築論	財務管理論
医事・事務部門管理	医事関連法規	病院経営管理概論
病院人事・労務管理	医療紛争	病院機能評価概論
病院管理概論	社会保障概論	先進医療概論
栄養食事管理	医療経済学	医療(病院)情報システム管理
病院物品管理	医療・介護保険制度	卒業論文

【別表】



テキスト、副読本、レポート